

目的

画一的に方法論化された再開発を否定する。それらによって、そこに住む人々の生活と記憶、地域性が失われているからである。再開発という行為がリセットではなく、連続していること。再開発がその場所だけの自己完結でないこと。再開発によって新しく建てられる建築が、そこにあった様々な過去を引き継いでいけること。再開発が過去を引き継ぐと共に、その場所に新鮮さをもたらすこと。これらを目的とし、本計画では、中国広州騎楼街区を対象とした再開発のオルタナティブな手法を模索する。

広州旧市街地

広州市は中国の改革開放政策の先進都市である。1980年代頃からの激しい都市再開発は、悠久たる歴史と伝統を有する広州をエネルギー溢る都市へと変貌させた。そうした再開発が、地域性の喪失とコミュニティの変容をもたらしている。その一方で、近年、広州市のアイデンティティとして騎楼街の保護整備事業が着手されるようになった。経済発展を目指しつつ、いかに都市を更新していくか。広州の都市は、今まさに過渡期を迎えている。



↑ 広州旧市街地



↑ 騎楼建築



↑ 騎楼街路



↑ 裏路地

騎楼建築

広州の旧市街地には騎楼（キロウ）と呼ばれる近代伝統建築が特有の街並みを構成している。騎楼とは西洋の建築様式と広州のモンスーン気候が交じり合って築き上げられた建築形式である。街路に面する1階前面の外壁をセットバックして、その部分を柱廊（歩道）とし、柱廊に支えられる2階以上の部分は歩道に跨るように建てられた建物である。歩道に面する1階部分は店舗、2階以上が住居として使われるのが一般的である。



↑ ギュウギュウ詰め敷地



↑ 老朽化住宅が密集している



↑ ライトウェルによって内部採光を確保している

設計対象敷地

広州市荔湾区逢慶社区1.2haを設計対象敷地とする。敷地は騎楼街路に面する老朽化住宅の密集地域である。敷地の北東側は保護対象となる騎楼が建ち並び、東側は市場、西側は暗渠された小川、敷地の中央と南側は生活の滲み出した裏路地となっている。



街区の現状の配置図 (scale=1:2000)



① 騎楼建築群



② 逢慶首約16.16-1



③ 小学校



④ 逢慶中約2



⑤ 逢慶中約12.12-1.12-2

保存建築

街区の裏路地には西関大屋、竹筒屋と呼ばれる騎楼と同時代に建てられた近代伝統建築が在る。現在、それらのほとんどは価値が不明瞭なまま取り壊される。再開発において、これらの建築物を保存していける可能性を与えておく必要がある。本計画では、保護対象である騎楼建築13棟とその裏路地に面する近代伝統建築3棟、現在分校として使われている小学校2棟、を保存可能な再開発を考える。

コンセプト

MEDIATED ARCHITECTURE=媒介する建築。

媒介とは、
①双方の間に立つてとりもちこと。仲立ち。とりもち。②あるものを他のものを通じて存在させること。
という意味をもつ。

例えば、街区の中に建替えられたあるたった一つの建築が、やがては街区を越えるほどに関係していく。
そのような建築は、花粉を媒介するミツバチのように善良と思える存在なのか、あるいは、病原菌を媒介する蚊のように厭わしく思われる存在なのか。
建築が周囲に対して受動的になり過ぎず、能動的に発信していける建築、人がその建築や街に気付き、考えることができる、人と建築が等しく向かい合える建築を目指す。

カワとアン

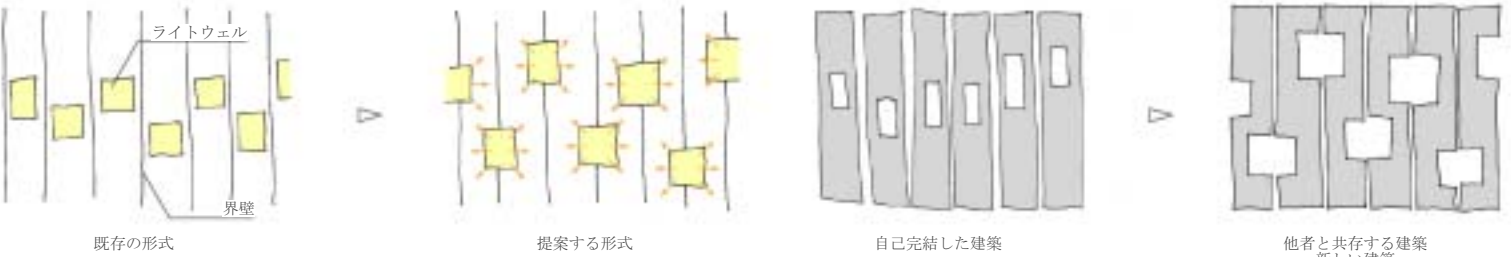
騎楼街区に広がる老朽化住宅の密集地帯において、騎楼を保存しながら再開発を行うことは非常に困難である。
車道に面するのが騎楼街路だけだからである。
街区を更新しようとした場合、保存建築である騎楼が車道との接道を妨げる。騎楼（保存建築）とその裏手の老朽化住宅（更新建築）
によるカワとアンの構図ができる。
騎楼を保存しながら街区の更新を考えるとき、この騎楼街区特有のカワとアンの構図に左右されない更新手法、すなわち、既存の路地
によって可能な小規模のスケールによる更新が必要である。
小規模の更新は同時に、段階的に建替えること、既存の路地を継承すること、生活とコミュニティの持続を可能にすること、である。



形式

既存のライトウェルと界壁の関係を少し変えてみる。
ライトウェルをずらすことでより多くの採光と通風を得ることができる。
界壁を越えて関係は広がっていく。

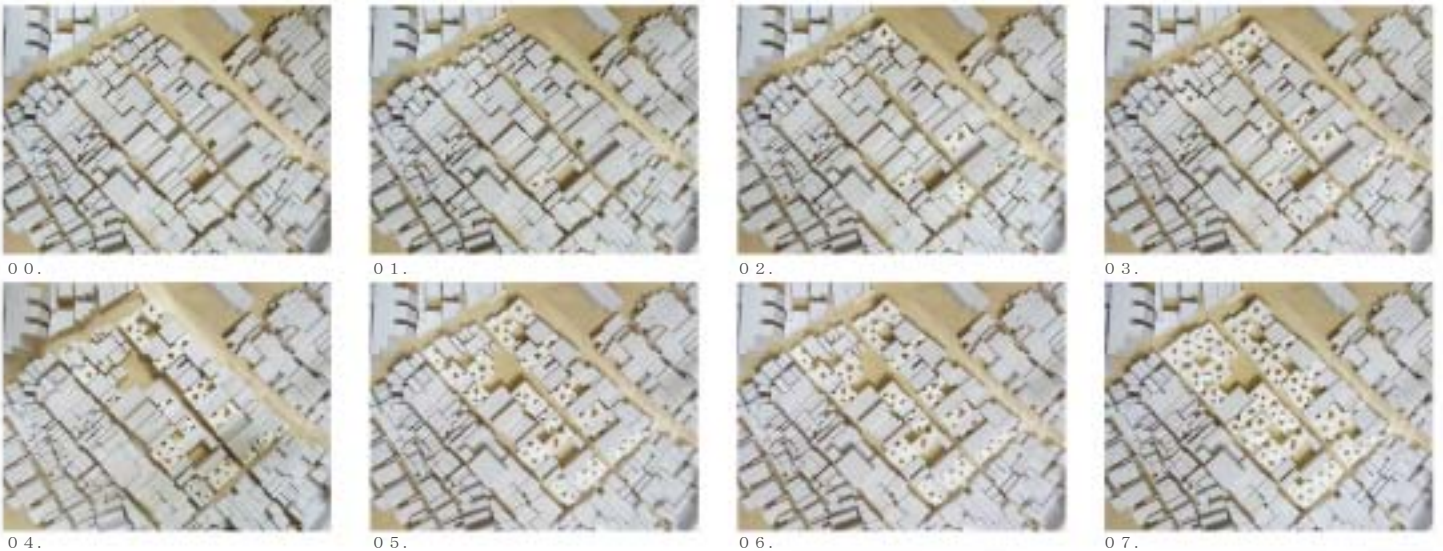
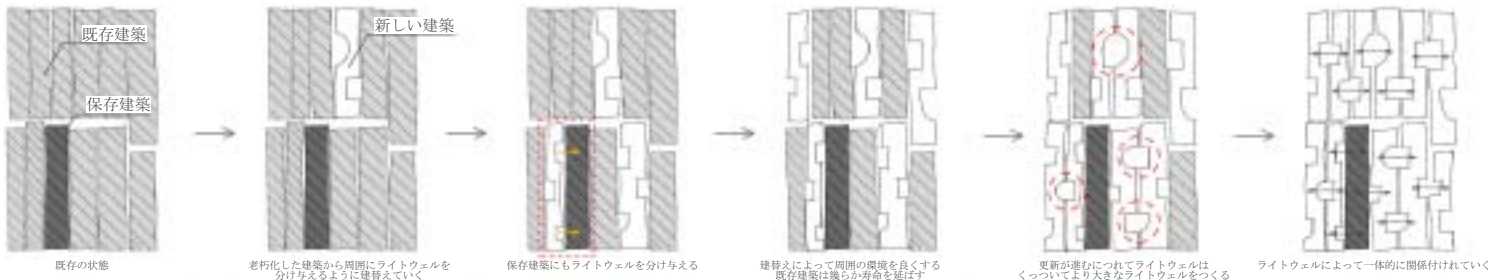
建築単体としては、短冊の一部分がライトウェルによって切り欠かれた平面形状になる。
内部環境の問題（採光・通風）を建築の外形として表すことによって、環境がその周辺まで
広がった更新を可能にする。建築の建ち方がそのまま周辺との関係をつくっていく。



更新

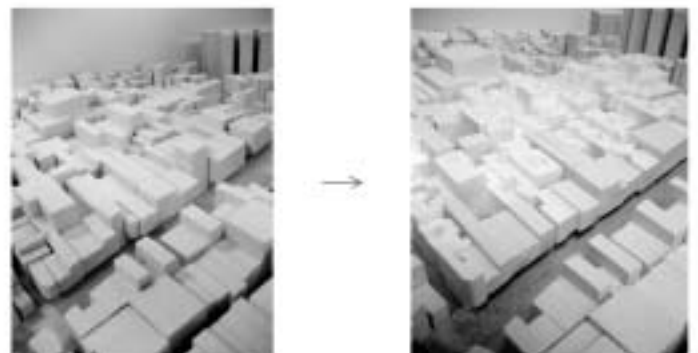
老朽化した建物から徐々に建替える。
先ず、老朽化した建物を取り壊されると、新たな建築が建てられる。このとき、建物の両側のライトウェルはその両隣の既存建築にも有効な採光・通風箇所となり、隣家の居住環境を幾らか改善させる。
時が経つにつれて、徐々に建物が更新されていき、はじめは半分の大きさしかもたないライトウェルも隣の建物が建て変わることによって一つの大きなライトウェルになり、環境をより良くする。

個々の建築が周辺と協力し、建替えていくことで常にその周辺に影響を与えていく。
はじめは1棟の住宅であるが、やがては周辺の建物と繋がっていき、戸建て住宅も集合住宅もその他の建物も含めて一体となって内部環境の連鎖をつくっていく。
計画敷地を飛び越えて広がっていく、旧市街地全域を射程とする更新の手法である。



更新後の姿

老朽化した建物から徐々に建替えていくことで、段々と全体ができていく。
徐々に建替えていくことで、結果的に建物の間口の大きさや広場の形、路地の
など更新前の姿が何となく残っている。
そのような建築の姿は、周辺にとってもごく自然な姿だと思える。



1階について

1階は住居の他に店舗、小ホール、ポケットパーク、スポーツコート、図書館、託児所、高齢者福祉センター、茶屋、市民ギャラリー、レストラン、コンビニがある。住戸の間を内部路地が通り、建物に囲まれた場所には屋外広場がある。

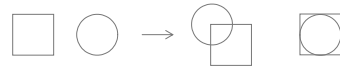


1st floor plan (scale=1:800)



ライトウェルの形について

ライトウェルは円と正方形の2つの幾何学をもとに、月が満ち欠けするように様々な形で構成する。それらはある秩序の中で、直線とカーブが混じりあった様々な平面パターンをつくりだす。カーブと直線が部屋を分けたり繋いだりしていく。形が多様であることで窓が様々な方向に向くことができる。



—恩寧路— elevation (scale=1:800)



—逢慶中約— elevation (scale=1:800)

立面について

レンガを主要材料とした騎楼街区の街並みは、重厚で歴史性のある印象を受ける。それぞれの建築は中国の伝統紋様と西洋の建築様式が混ざり合った非常に豊かな外観である。そのような場所の建ち方として、抽象的な白い壁や打ち放しコンクリートの無垢な外壁では、周囲の建物に圧倒されてしまう。ここでは、外観は5色のレンガタイルを棟ごとに使い分けた。棟ごとに色を変えることは、スケールの分節をより明確にする。全体として調和させながらも、少し鮮やかで楽しく街並みに参加していこうと考えた。



section (scale=1:800)

断面について

断面は内部空間とライトウェルが交互に繰り返され、棟ごとに階高を切り替えることで直接的な視線の交わりを避けている。屋上の木々は様々な高さで山並みのようになって現れる。様々な高さで木々と接することができる。



内部路地について

既存の路地からライトウェルと住戸のピロティ空間を連続させ内部へ路地を通した。天井の低いピロティと空まで吹き抜けたライトウェルが交互に続く特別な路地である。内部路地は暑い日差しとスコールの多い広州の街に有効な日陰・雨宿り空間をつくる。



住戸内観について

何れの住戸も様々な方向に開口をもつ。そのため、ある一定のライトウェルの周りにたくさんの人が集まるというのではなく、内部空間には居場所の多様な選択性が与えられる。内装はライトウェルからの光をより内部へ導くために白くする。真っ白なインテリアの中に外壁のレンガと家具があざやかに浮かびあがる。内部空間はインテリアでありながら常に外観を意識できる。



屋上について

旧市街地のようにこれだけ建物が密集していると、十分な緑地やオープンスペースを確保することは難しいが、かえって建物が密集していることで屋上が一つの大きなオープンスペースとなるのではないかと考えた。3階までの低層の屋上は木々が育つように緑化を図り、屋上に緑陰と新たな風景をつくる。4、5階の住戸からはその風景を楽しむことができる。



まとめ

本計画では、広州旧市街地の騎楼をはじめとする近代伝統建築の保存と居住者の生活が持続可能な再開発を提案した。

老朽化した住宅から徐々に建て替えていき、ライトウェルの形式を再構成し、親自然的住環境を創造する。それは、更新する建築だけのものではなく、その周りの既存建築にも享受される。再開発することが保存することにもなる。

再開発と保存という一見、水と油のような2つの関係を同居させた。本来この2つは二者択一ではないはずである。それらが同時に存在できることは、都市が持続しているということだと思う。